

西中国山地鳥類調査報告¹

日本野鳥の会広島県支部²

はじめに

広島県支部では、1981年に西中国山地鳥類調査プロジェクトを発足させた。これは、広島県、島根県、山口県にまたがる「西中国山地国定公園」内の鳥類相を把握しようとするものである。当山地は、標高1,300 mクラスの山々の連なりであるが、ブナを主とする原生林、自然林が散在し、特別名勝の三段峡など峡谷にめぐまれ、また高原状の山地も多い。それ故、調査にあたっては、森林、峡谷、高原の三要素を特に考慮した。

1981年には、天狗石山で予備調査を行うにとどめ、1982年6月6日に第1回調査を実施した。今回は、繁殖状況に重きをおき、繁殖種類数を中心に記録をまとめた。なお、当地域では晴山・白附(1959)のほか調査例は大変少ない。

調査地域

調査地である「西中国山地国定公園」は中国山地の西部にあり、広島、島根、山口の3県にまたがっている。公園の面積は28,553 haである。北東から南西に山地が連なり、阿佐山(1218 m)、恐羅漢山(1346 m)、冠山(1339 m)などが並んでいる。山地には柴木川、匹見川、宇佐川などが流れ、三段峡、匹見峡、寂地峡などの溪谷が形成されている。溪流により山腹部は浸食されて急斜面となっているが、山頂部は比較的平坦である。植生は、ブナを主体とする自然林で、山稜には原生林が残されている。また、溪谷にはウラジロガシを主とする常緑広葉樹林が残されている。調査は、国定公園のなかの8カ所を選んで実施した(図1)。

調査方法

当プロジェクトは、プロジェクト・チームを組み、更にその下に8つのサブ・チームを設けて、各々わりあてられた8か所の調査地(地図参照)に出向き一斉調査にかかった。8か所の調査地点のうち2か所は、当日早朝に現地着となったが、4か所は前日より山の会などの山小屋に泊り込み、2か所はテントを利用し、夜の鳥の調査にも力を入れた。

現地での調査は、それぞれの調査地点で最も適当と思われるコースを前もって設定し、1978年に日本野鳥の会が行った繁殖地図調査方法に準じてロードサイド・カウントを主に

1982年10月13日受理

1. 執筆者：中林光生、〒739 広島市安佐北区高陽町矢口660-608.
2. 〒733 広島市中区江波南2-18-6 大丸奈美子方.

行い、適当な2か所で定点カウントを実施するものとした。

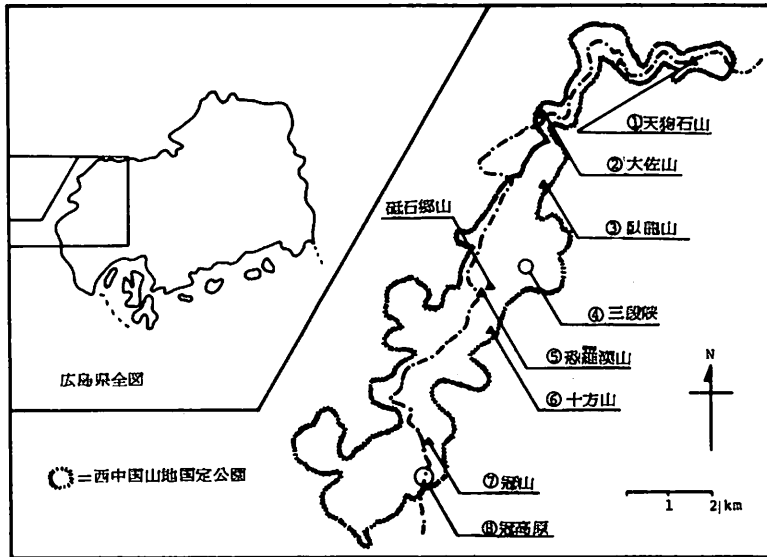


図1. 西中国山地国定公園概略図。

調査結果および考察

1982年6月6日実施の現地調査の結果と1979年よりあと繁殖期に当山地において得られた資料（個人のデータ等）をもとに生息鳥類一覧表を作成した。表中には、鳥類繁殖地図調査（1978）の基準による繁殖ランクを示した。表にみられるように、当地域では29科67種の鳥類が記録され、そのうち、Aランクが19種、Bランクが38種、Cランクが10種であった。表では、各調査地で観察された種類に○印を付し、その中で最も高い繁殖ランクを取りだし表に記してある。また、タカ類の観察例は猛禽類保護上の見地から意図的にはふいた。

今回は第1回の調査であり、環境と生息種類の関係、あるいは環境と個体数の関係などを論ずることはできない。ここでは、新たに生息の確認されたもの、繁殖の確認されたもの、以前に観察されながら1979～1982年には観察例のないもの、などについて簡単に説明するにとどめたい。

ガン・カモ目

オシドリを観察例が2つ、冠山地域（1981, 6, 2）と三段峡地域（1982, 6, 10）のものがある。いずれもヒナ連れの親鳥が確認された。両地域とも毎年繁殖しているようであり、更に観察例は増えるものと思われる。

チドリ目

オオジシギの生息は、1982年6月5日広島県内では初めて確認された。大佐山ふもとの牧場内（標高680m）でディスプレイ飛行をしながら特有の音をたてるところを観察。この日から7月10日までは、午後7時ころから深夜までディスプレイ音が聞かれた。繁殖

の確認はできなかったが、その可能性は十分に考えられ、広島県内の高原を見なおすきっかけになるものであった。

フクロウ目

一斉調査に関しては、フクロウもアオバズクも観察例はなく、数は非常に少ないものと思われる。しかし、コノハズクの観察は3例あった。恐羅漢山、十方山、三段峡内の原生林で、いずれも1982年6月5日夜にその囀りが聞かれている。午後7時頃から夜半まで囀りは続いた。恐羅漢山では6月13日まで、十方山では6月27日まで囀りは追調査により確認されている。この種の観察例は、この調査以前にもあり、繁殖の可能性は高いものと思われる。

アマツバメ目

ハリオアマツバメが繁殖期に初めて観察された。1982年6月6日、砥石郷山南峰頂上空(標高約1,200 m)を4羽が舞い飛ぶのが見られた。午前中に2度、9時台と10時台にそれぞれ数分間の群飛であった。しかし、その後、午後2時まで待っても姿を現わさない。また、1982年7月30日、やはり同じ所で午前10時台に2羽が観察された。そして、この日も午後2時半まで待っても現われなかった。この山頂には木がないが、近くには自然林、原生林がひかえており、大木の樹洞などに営巣すると言われる習性からして、繁殖の可能性がないとは言えない。

スズメ目

今回は、サンコウチョウの記録がなかった。個体数が少ないものと思われる。コルリに関しては3地域での観察例がある。十方山の自然林、冠山の原生林では当調査日にそれぞれ1羽ずつ囀るのが聞かれた。十方山では1週間後の6月13日にも同じ場所で観察されているし、冠山では数年来5、6月に囀りが聞かれている。もう1か所、臥竜山の原生林で今年の7月に2度にわたって囀りが聞かれている。いずれも、繁殖の可能性は高いものと思われる。

ノビタキの繁殖は、当調査日に冠高原で確認された。ヒナ3羽が居る巣に親が餌を運ぶのが観察されている。高原は、レンゲツツジの群落が点在する草原(標高約800 m)である。このような環境が、この地域で鳥にとってどのような意味を持つのか、今後県内の他の高原との比較によってさらに面白い結果が得られるものと思われる。

コヨシキリも当高原で調査日の2日後、6月8日に囀るのが聞かれた。しかし、繁殖については今のところ何とも言えない。メボソムシクイの囀りが十方山で調査日に聞かれた。しかし、広島市街地でも5月末に通過個体があることから、繁殖については確定的なことは今のところ言えない。

三段峡内の原生林で観察されたキビタキ雄1羽は変わった個体であった。眉斑も翼の白斑も、腰と腹面の黄色も欠き、色といえば、のどから胸にかけてくっきりと橙色の部分があるだけである。当調査日の2日後には、この雄が導くなかで4羽のヒナが巣立っていった。この雄が同じ所に戻るかどうか今後に興味を持たれる。

ホオアカについては、当調査日に冠高原で1羽の姿が見られており、1980年6月28日に臥竜山ふもとの牧場(標高約1,000 m)で囀りが聞かれた例がある。

アオジは、広島県内では初めての記録であった。1982年6月13日、十方山の自然林で1羽の囀りが聞かれた。しかし、これ以外の調査行はなく、この種の動静は把握できてい

表 1. 西中国山地で記録された鳥類

The list of birds observed in Nishi-Chugoku-sanchi Quasi National Park. Rank A; confirmed breeder, Rank B; probable breeder, Rank C; possible breeder.

鳥名	ランク	天狗石山	大佐山	臥竜山	三段峽	恐羅漢山	十方山	冠山	冠高原
オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	(A)			○			○	
ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>	(B)							
トビ	<i>Milvus migrans</i>	(C)	○	○	○		○	○	○
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	(C)							
ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	(C)							
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	(C)							
サシバ	<i>Butastur indicus</i>	(B)							
クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	(A)							
コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>	(B)	○						
ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringii</i>	(B)	○	○	○	○	○		
キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	(A)		○			○		○
オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	(B)		○					
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	(B)	○	○	○	○		○	
アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	(B)	○		○	○	○	○	
ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	(A)	○		○		○	○	
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	(B)	○	○	○		○	○	○
ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	(B)	○		○		○	○	
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	(B)	○	○	○		○	○	○
コノハズク	<i>Otus scops</i>	(B)			○	○	○		
フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	(B)		○					
ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	(B)	○	○			○		
ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	(C)				○			
ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	(A)		○	○		○		
アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	(A)		○	○		○	○	
ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	(B)			○				
アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	(B)	○	○	○		○	○	○
アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	(A)			○		○	○	
コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	(B)			○	○		○	
ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	(B)		○	○				○
ツバメ	<i>Hiurndo rustica</i>	(B)		○	○			○	○
イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>	(A)			○		○	○	
キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	(A)		○	○		○	○	

鳥名	ランク	天狗石山	大佐山	臥竜山	三段峽	恐羅漢山	十方山	冠山	冠高原
セグロセキレイ <i>Motacilla grandis</i>	(B)		○						○
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>	(A)	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ <i>Lanius bucephalus</i>	(A)	○	○	○			○	○	○
カワガラス <i>Cinclus pallasii</i>	(B)	○			○		○	○	
ミソサザイ <i>Troglodytes troglodytes</i>	(B)			○			○	○	
コルリ <i>Erithacus cyane</i>	(B)			○			○	○	
ノビタキ <i>Saxicola torquata</i>	(A)								○
トラツグミ <i>Turdus dauma</i>	(A)		○	○		○	○	○	
クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	(B)	○		○			○		
ヤブサメ <i>Cettia squameiceps</i>	(B)	○	○	○	○	○	○	○	
ウグイス <i>Cettia diphone</i>	(B)	○	○	○		○	○	○	○
コヨシキリ <i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	(C)								○
メボソムシクイ <i>Phylloscopus borealis</i>	(C)						○		
センダイムシクイ <i>Phylloscopus occipitalis</i>	(B)					○	○		
セッカ <i>Cisticola juncidis</i>	(B)		○	○					○
キビタキ <i>Ficedula narcissina</i>	(A)	○	○	○	○		○	○	
オオルリ <i>Cyanoptila cyanomelana</i>	(B)	○	○	○	○	○	○	○	
コサメビタキ <i>Muscapa latirostris</i>	(B)			○					
エナガ <i>Aegithalos caudatus</i>	(B)	○	○	○		○	○	○	
コガラ <i>Parus montanus</i>	(B)	○		○		○	○		
ヒガラ <i>Parus ater</i>	(A)	○		○	○		○	○	
ヤマガラ <i>Parus varius</i>	(A)	○	○	○	○	○	○		
シジュウカラ <i>Parus major</i>	(A)	○	○	○	○	○	○	○	○
ゴジュウカラ <i>Sitta europaea</i>	(A)			○	○		○	○	
キバシリ <i>Certhia familiaris</i>	(B)			○					
メジロ <i>Zosterops japonica</i>	(B)		○	○	○				
ホオジロ <i>Emberiza cioides</i>	(A)	○	○	○		○	○	○	○
ホオアカ <i>Emberiza fucata</i>	(B)			○					○
アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>	(C)						○		
カワラヒワ <i>Carduelis sinica</i>	(B)		○	○					○
イカル <i>Eophona personata</i>	(B)	○	○	○		○	○	○	○
スズメ <i>Passer montanus</i>	(B)		○					○	○
カケス <i>Garrulus glandarius</i>	(B)	○	○	○	○	○	○	○	
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	(C)		○	○		○	○	○	○
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	(C)	○	○	○		○	○	○	

ないこともあり、繁殖についての判定は今回慎重を期したい。キバシリの観察例は1979年5月3日の臥竜山のものである。当日は求愛給餌と思われる行動が見られ、同年は6月17日になっても姿が見られている。これにより、繁殖の可能性は十分あると思われる。

その他の目に関しては、キツツキ目のオオアカゲラが今回の記録に入っていない。以前から生息することは当山地の各所で知られながら、観察することができなかった。

おわりに

この調査は、これからも毎年1度は行い、更に精密さを増すよう努力していきたい。また、県内の他の重要な生息地域を2か所から3か所参考調査地点として設定し、そこでの結果と比較することにより、「西中国山地国定公園」内の鳥類相の位置づけができるよう資料を積みかさねていきたい。

なお、8個のサブ・チームのメンバーは次のとおりであり（○印はリーダー）、記録のまとめは中林光生、住岡昭彦が行った。

1. 天狗石山：○小島規嗣，荻原巧，田中弘，井原庸，石井鶴三。
2. 大佐山：○住岡昭彦，松岡志郎，沖山利治，泉剛
3. 臥竜山：○大丸秀士，伏見健一郎，出口義弘，真崎博之。
4. 三段峡：○河野一成，小坂一章，森本栄。
5. 恐羅漢山：○吉見良一，河原清，佐々木隆博，松本聖二，塩田絹子，福本幸夫。
6. 十方山：○大迫昭雄，中林光生，藤田欣也，東常哲也，井上孝。
7. 冠山：○日比野政彦，西本悟郎，飯田知彦。
8. 冠高原：○佐伯暢彦，増田圓，今出政明，柴田曉美，梨和佐紀子，清水和。

要約

1982年6月に西中国山地国定公園で鳥類の繁殖状況を中心に調査を行った。1979年からの資料を加えると、調査地域では67種が記録され、繁殖に関しては19種がAランク，38種がBランク，10種がCランクと考えられた。

文献

晴山省吾・白附憲之。1959。「三段峡・八幡高原の鳥類」，三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告，広島県教育委員会，広島。

Wild Bird Society of Japan. 1978. The Breeding Bird Survey in Japan.
Wild Bird Society of Japan, Tokyo.

Bird Survey in Nishi-Chugoku-Sanchi
Quasi National Park

Hiroshima-ken Chapter, Wild Bird Society of Japan

The first breeding bird survey in Nishi-Chugoku-Sanchi Quasi National Park was conducted by the Hiroshima-ken Chapter of WBSJ. Of the 67 species inhabiting this area during the breeding season, 19 were confirmed breeders, 38 were probable breeders, and 10 were possible breeders. Among other new records for Hiroshima Prefecture during the breeding season, Latham's Snipe (Gallinago hardwickii), White-throated Needle-tailed Swift (Chaetura caudacuta), Stonechat (Saxicola torquata), and Black-faced Bunting (Emberiza spodocephala) are to be noted.

Eight survey fields were selected, featuring primeval forests, gorges, and highlands. Counts were made by 36 observers in the manner of the Breeding Bird Survey (1978). The data obtained were supplemented by a survey of literature covering the period between 1979 and 1982.

This is the first survey carried out generally and systematically in this area. More data are needed so this survey, one of the main research programs of the Hiroshima-ken-Chapter, is to be conducted at least once every year.

c/o Minako Daimaru, 2-18-6 Enami-Minami, Naka-ku, Hiroshima-shi 733